

幼保一元化問題における保育概念の検討

—— フレーベルの「保護養育」思想を手がかりとして ——

青 木 美智子

はじめに

本論の課題は、近年急激に進行している公的保育制度の転換にあたって、保育という営みに不可欠の要因とはなんであるのかを、F.フレーベルの「遊びの保護養育」(Spielpflege) 概念の分析を通じて、思想的に把握することを試みることにある。

周知のように、小泉政権下において「聖域なき構造改革」を旗印に推し進められてきた規制緩和と市場原理主義は、福祉・医療・教育の場にも導入された。就学前教育にとってそれは、公的な保育制度の解体として決定的に現れてきている、といわれている[逆井、2008:21]。生まれて間もない乳児から就学前までの子どもたち、つまり人生の最初期にある人間を預かり、その身体生命を保護し、心身の発育を見守りかつ励まそうとする保育施設にとって、この複雑多岐にわたる営みを「保育サービス」として捉え、この「サービス」の質を市場の原理に委ねようとする政策的な方向は、保育そのものの本質を毀損しかねない危険をはらむものであった。

例えば垣内国光は、「保育を営利の対象とし競争することが良い子を育てる条件になる、という考え方が持ち込まれてきた」[垣内、2006:8]結果、入所児童が置かれる環境の悪化、保育士の労働条件の低下が深刻な問題が生じていることを、事例に則して報告している。また自身も長く保育士として働いた経歴を持つ近藤幹生は、近年の保育制度改革の動向は「子どもにかかわる公的責任をあいまいにして、財政支出を減らすことが目的であることは明らか」[近藤、2006:3]であるとし、現在急速に推し進められようとしている「認定こども園」の構想は、それぞれに異なる役割や機能を持って営まれてきた保育所と幼稚園の相違を考慮せず、経済効率を優先させているところに大きな問題があると指摘している。

この保育所と幼稚園の相違点について森上史朗

は、ふたつの施設には制度的にも内容的にも区別がみられ、それぞれに発展してきたという歴史的経緯を明らかにしている[森上、2003、2005、2008]。したがって二つの施設の統合は、この差異を十分に考慮に入れながら慎重に行われるべきであるのに対して、近年の一元化の動きでは、「保育の理念や保育の質の確保といった点からすると多くの課題を残すもの」[森上、2003:11] であるとしている。

この保育活動の内容や質、そしてそれらを規定している保育観に踏み込み、一元化問題を検討するものとして、鯨岡峻、大宮勇雄らがいる。両者はそれぞれアプローチを異にしているものの、どちらも「関係」をキーワードに置く点では共通性がみられる。鯨岡は、「子どもから大人へ」という、個人の能力発達に基づいた従来の発達観を批判し、「育てるもの」と「育てられるもの」との相互のダイナミズムに発達の根本を置く「関係発達」という新しい観点を提起した[鯨岡、2002]。鯨岡の独自の発達論から導かれてくる保育論は、幼保一元化時代の保育活動に理論的な枠組みを提供しうるものである。しかし近年の一元化の流れは、子どもが長時間生活する場の保障という観点が軽視される傾向にあり、代わって「目に見える育ちの結果を追い求めて、心の育ちの面がおろそかになっている」[鯨岡、2008:10f.]と警鐘を鳴らしている。

大宮勇雄は、「保育の質を高める」という観点から、現在の保育政策と対峙し、保育における質とは何かを問い直そうとしている[大宮、2006]。大宮は「保育を構成している人と人との関係の質」[ibid.6]という「関係」論的な視点[ibid.]から、この質を高めるための諸条件を提起している。

このように、森上によれば「戦後最大ともいえる転換期」[森上、2005:92]である保育制度の「改革」は、保育という営みを多角的な観点から再び問い直す必要を生じさせた。先行する諸研究のアプローチは多岐に及んでいるが、最終的に解き明かそうとし

ている中心地点は、同一のものであるように思われる。すなわち、今日わたしたちの社会は、この時期の子どもたちをどのような存在として捉えようとしているのか、という子どもにまつわる観念の問い直しであり、またこの事から導かれてくる次の問い、わたしたちは彼らにどのような環境を整えることができるのか、つまり、保育という営みについての見直しである。

本論では保育制度の転換期にあたって、〈保育〉と呼ばれてきた活動がこれまで何を示してきたのか、そして今後どのように変わろうとしているのかを、保育概念の変遷という観点から接近してみようと思う。というのも、そもそも保育と呼ばれてきた活動そのものが保育制度の根幹に根を張ってきたのであり、それが安定していることによってこの制度の進歩や発展を可能にしてきたのである。したがっていま保育の何が危機に直面しているのかを、保育思想をめぐる問題として把握することが必要なのではないだろうか。

そこで本論では、具体的には、フレーベルの「遊びの保護養育」という概念を分析することにより、フレーベルが「人間の教育」の基礎として位置づけたこの時期の子どもの教育が、「保護養育」(Pflege)の思想としていかに構想されたのか、そしてそれがなぜ単に「幼児期の教育」としてではなく、「保護養育」という特別な概念として提起されたのかを検討したいと思う。

以下第一章では、保育という語によって、就学前教育施設における活動をどのように意味づけてきたのかを、第二章では、いま、同じこの言葉によって、何が、どのように読み替えられようとしているのかを問題にする。そして第三章において、保育の本質とはどこにあると考え得るのかを相対化し、原理的に遡るための考察の対象として、フレーベルの「遊びの保護養育」という概念を分析する。

第一章 歴史的に構成されてきた概念としての〈保育〉

1-1. 〈保育〉の語源と定義

「保育」という言葉は、日本の就学前教育において乳幼児期の教育を言い表す言葉として長く使われてきた。この言葉には、この時期の子どもたちへの特有の働きかけがある、あるいはあるべきだとする考

え方が反映されており、「学校教育」や「幼児教育」といった時の「教育」とも異なる、「保育」という語によってしか表し得ない、固有の活動の表現であるということができる。

その語源については、汐見稔幸が「中国に昔からある幼い子どもを育てる役職を指すことばであり、明治のはじめから幼稚園で使われていた」〔汐見、2008：5〕と指摘しているように、かつては「傳育」とも表記し、「まもりそだてる」こと、「かしづき育てる」ことを意味し、「傳育官」は「皇子を傳育する官」を指すものであった¹⁾。したがって「保育」は、語源的にも「まもりそだてる」「かしづき育てる」という、保護的、追随的な養育のあり様を意味する語であった。

この語が示す範囲はやがて、日本の就学前教育において独自の展開をみせるようになる。それは、単に「まもりそだてる」という保護養育的な働きかけのみを指すものとしてではなく、学校教育を前提としたこの時期の子どもたちへの意図的組織的な働きかけ、すなわち教育をも包含する、より広い範囲を指し示す言葉として慣用されるようになっていったのである。

例えば宍戸健夫は、『日本の幼児保育』において昭和期の幼児保育を実践、運動、制度そして理論の歴史という多角的な観点から明らかにしたが、その序文で、「保育」という言葉を次のように定義している。

幼児保育とは、主として幼稚園・保育所などの就学前の子どもたちの保育施設における保育（乳幼児を対象とする養護と教育）を指している。〔宍戸、1988：iii.〕²⁾

ここで宍戸は「保育」を、「養護」と「教育」の二つの要素によって構成されるものとしている。このような「保育」の定義は今日なお引き継がれるものであり、森上史朗もまた同様に保育という語が示す二つの側面を次のように指摘している。

乳幼児期の教育については、一般的に「保育」という用語が慣用されてきた。それは、乳幼児の教育は、「養護」と「教育」が一体となって取り組まれることが基本と考えられてきたからである。〔森上、2008a：4〕

就学年齢に達した児童を対象とする学校教育とは異なり、乳幼児期を含んだ未だ幼い子どもたちを対象とする就学前教育施設の場合、そこで行われる活動の基盤には、身体生命の安全にかかわる、保健衛

生的な働きかけが据えられることは当然である。このような保護養育的な働きかけが前提であると同時に、知的な、精神的な、そして身体的な発育を促すための積極的な働きかけが行われる。このことから、むしろ「保育」が、広く人間形成全体にかかわる教育的な営みの一側面に確かに位置を占めている、ということに関しては、疑いを入れる余地がないのであるが、しかし一方で、改めて学校教育段階で行われている活動と比較した場合、内容的、施設設備的、子どもたちに必要な配慮といい、明らかに固有の、強調されるべき特質がある。それが保護養育という要素であり、この要素が就学前教育の活動全体を決定づけているがゆえに、そこでの営み全体を指し示すための、「保育」という概念が必要とされてきたように思われる。

こうして保育は独自の領域として成立してきたのであるが、しかし、このことが反対に、「教育」との質的な差違として浮かび上がることにもつながった。

就学前教育における保護養育の観点を強調した場合、しばしば保育活動は家庭の代替的なものという理解にとどまってしまう。一方で「教育」は、学校教育のイメージをこの時期の子どもたちにも強いる結果となり、就学年齢段階で必要となる学力を形成することとして矮小化されてしまうことになる。

「保育」を構成しているはずの「養育」と「教育」という二つの要素が、今度は「養育」か「教育」か、という、二者択一的な議論の呼び水ともなってしまったのである。それはあたかもこの時期の子どもに対する、二つの異なる働きかけが存在するかのような考え方を生じさせるものであった。

1-2. 保育における〈保護養育〉と〈教育〉の関係

森上は日本における就学前教育が、幼稚園と保育所という、二つの制度、施設、内容によって成り立ってきた経緯を明らかにすることで、教育と保護養育とに分かたれてきた保育観の相違を、二つの施設の「発祥の起源にまでさかのぼることができる」〔森上、2003：4〕としている。

周知のように、日本の就学前教育施設は、一方でフレール主義を範とし政府主導で創設され、これが「幼稚園」という形態で普及し、他方では働く親たちの必要から生じた託児施設の発展という、二筋の流れを形成してきた〔森上、2003.〕。前者は「わ

が国近代化の象徴として、海外の先進国に一日も早く追いつき追い越せとする当時の先覚者の願望をこめて設立されたもの」であり、ここに子弟を通わせることができたのは、「一部の上流階級に限られ、一般庶民には全く無関係」であり、そうした幼稚園が持つ「体質」は、その後全国に普及していく過程においても「かなり長期にわたって継続され」〔ibid. 4〕ていくものであった。これに対して後者は「幼稚園の制度とは別に、庶民の生活上の必要に迫られて設けられるようになった」〔ibid. 5〕。その起源は明治23年に新潟市の赤沢夫妻が家塾の新潟静修学校の付帯事業として子守学校を設けたことに始まるといわれ、その後「女性労働者の増加に伴って工場付設の託児所が各地に設けられるようになった」〔ibid.〕もので、これが後の保育所につながっていった。したがって日本の就学前教育は、両施設の発祥に由来する性質の違いが表しているように、幼稚園は将来有為な人材を育むために幼児期からの教育に力点を置き、保育所は就労家庭における日中の「保育に欠ける子どもの保育」のための、「養護」活動に力点を置くものであるとする考え方が長く続いてきたのである。

このような二つの施設における保育観の違いを表す端的な例として、戦後文部省が幼稚園と保育所における保育活動の違いを、「教育」と「養育」との差において区別しようとしたとする、汐見の指摘がある〔汐見、op.cit.: 5〕。

第2次大戦前、文部省は…託児所といわれていた保育所を厚生省が勝手に「保育所」と言い始めた昭和10年代に、それに異議を唱えたという歴史がある。勝手に保育ということばを使うなかれ、それは幼稚園の使うべきことばである、というわけである。…児童福祉法ができて(1947年12月)託児所ではなく正式に保育所となったときに、やはり文部省は異を唱え、国会でも、幼稚園の保育は「保護教育」の略、保育所の保育は「保護養育」の略だと説明された。〔ibid.〕(下線引用者)

つまり文部省は、戦前戦後と一貫して幼稚園という就学前教育施設が持つ教育的な側面を強調し、託児的な側面は託児所あるいは保育所に属するものと説明してきたというのである。

これらのことは、保育という語によって包括しようとする範囲が、多層的な構造を持つということを示

意味している。その第一の層は、「学校教育」との対比における、保護養育的な配慮を基礎とする保育という固有の教育という層である。ここでは「教育」に対する「保育」という活動が問題となっているのである。だがその一方で、保育所との対比における幼稚園の〈教育活動〉が存在しているという側面があり、このことが「保育」それ自体の中に、第二の層を作り出している。つまり上の引用が端的に表しているように、「保護教育」と「保護養育」という二つの働きかけの区別が生じる、というのである。

1-3. 幼保一元化がもたらす保育概念の見直し

このような保育概念上の区別は、保育の理想的実践的な必然によって生じたからではなく、二つの施設を継続して維持する社会的な環境によって成立してきたといえる。実際、地域の子どもに平等に保育を受けられる機会を提供すべきであるとする理念に基づく「幼保一体型施設」の実践は、1970年代後半から80年代にかけて、例えば大阪府交野市の「あまだのみや幼児園」、秋田県飯田川町の「若竹幼児教育センター」等々によって試みられてきた。しかし全体としては、幼稚園と保育所は社会的な機能を異にして存在してきたのであり、保護養育と保護教育という区別もまた継続してきたといえる。

したがってこの区別が再び保育政策上見直しを迫られるようになったのは、やはり「少子化」³⁾という社会的な要因によってであった。端的に言えば、乳幼児人口の激減のために、一つの区域で二つの施設を運営するのが困難になったのである。地方では子どもの絶対数が少ないために二つの施設の統廃合が進まざるを得ないという事情が、一方都市部では、共働き世帯が増加しているため、幼稚園の入園児童数は減少しても保育所の入所を希望する児童数が増え、待機児童問題が年々深刻となっていった⁴⁾。そのため都市部では児童数の減少した幼稚園に保育所の機能を併設する幼保一体的な施設が求められるようになった〔森上、2005〕。

2006年10月から施行された「認定こども園」は、幼稚園と保育所の内容的、施設設備的、制度的な一元化を目的とし、「就学前教育・保育を一体として捉えた一貫した総合施設」である。この総合施設の構想は、2005年度から全国35施設において総合施設モデル園が試行されるという多少の準備期間は設けられていたとはいえ、二つの就学前教育施設の何を、

どのように統合し、この時期の子どもたちのために公的な責任はどのように果たされるべきなのかが十分に検討されていないがために、拙速に過ぎるとの批判が起こっている。というのも今回の一元化では、いまだ保育に対する思想的概念的な検討が不十分のまま経済効率を優先させる形で統合されてしまったために、従来の養育か教育かという二要素の分離がそのまま持ち込まれて一元化される危険にさらされている、というのである。

第二章 〈幼保一元化〉時代の保育構想

2-1. 新保育所保育指針における〈保育〉

2008年3月に保育所保育指針が告知され、新指針は2009年4月から実施されることになった。これまで指針はガイドラインとして示されてきたが、1965年の制定以来三度目の改定となる今回、指針は厚生労働大臣の告知となり、すべての保育所が遵守すべき法的な文書となった⁵⁾。指針は冒頭で「保育所は、…養護及び教育を一体的に行うことを特性としている」としながら、この指針の「解説書」にある保育の目標では、保育を次のように規定している。

保育には、子どもの現在のありのままを受け止め、その心の安定を図りながらきめ細かく対応していく養護的側面と、保育士等としての願いや保育の意図を伝えながら子どもの成長・発達を促し、導いていく教育的側面とがあり、この両義性を一体的に展開しながら子どもと共に生きるのが保育の場であるといえます⁶⁾。〔解説書〕2008：21〕

しかし鯨岡俊によれば、この新しい指針における保育概念には、「ねじれ」が起こってしまっているという〔鯨岡、2008〕。実は上に引用した解説書の保育の定義は、もともと鯨岡が「本誌（『保育通信』）平成十九年一月号に私が書いた内容とほとんど同じ内容」〔ibid.〕であり、「解説書」にこういう文言が盛り込まれたのは、ある意味で驚きだったといわねばなりません」という〔ibid.〕。

というのも鯨岡の一貫したこれまでの主張では、保育とは「養護と教育を一体的に展開する」ことに特性を持つ。したがって保育それ自体は、幼稚園においても保育所においても行われている、という理解になる。これに対して指針は、一見鯨岡の概念把握を踏襲しているかに見える一方で、実は鯨岡の真

意を裏切ることになっている。つまり、「養護と教育が一体となって展開する」のが「保育所の特性」とされているがために、これが幼稚園に対する保育所の特性として強調されてしまうのである。すると、ここから導かれてくるのは、一元化してもなお養護と教育とが分離したままの次のような事態である。

やはり従来どおりの、「保育所には養護があるが、幼稚園には養護がない」という議論が温存され、午前中の三歳以上児の保育は「幼児教育」で括ってもよいし、そこは幼稚園と同じだが、保育所には昼寝以後の生活があるから、やはり幼稚園とは違うのだという議論になり、結局、養護は三歳児未満のお世話や、昼寝などを含めた生活の重視という中身に還元され、それが生命を守り、情緒の安定を図るという主旨なのだというふうに、これまでの養護の理解がそのまま踏襲されることになりそうなのです。[ibid.]

鯨岡は幼稚園に対する保育所の特性とは、このような保育そのものの捉え方にあるのではなく、保護者の生活実態と結びつき、「子どもが保育の場で長時間生活する」というところに、幼稚園とは異なるその「特性」がある」[ibid.] のだと強く主張している。

2-2. 二つの子ども観と保育観の関係

大宮勇雄は、OECD(先進工業国でつくる経済協力機構、29カ国加盟) 報告を通じて、日本の保育制度改革を批判的に検討している[大宮、2006]。その分析によれば、「今、世界は、就学前の数年間は無償で幼児保育を行う「ユニバーサルアクセスの時代」に突入している」[ibid. 19]のであり、日本の保育政策の動向はこの世界的な無償化の流れに逆らう、いわば時代錯誤の方向へ向かっているという。

報告書は無償化の流れを支えているのは、幼児期が人生最初のステップとしてきわめて重要な意義を持つという認識であると指摘している。しかしこの時期をどのように捉え、社会が何を期待するかという保育観に関しては、異なる二つの特徴がみられるとしている。

その一つは、「[子どもを未来の労働力]として捉える」子ども観である[ibid. 20]。この立場は、この時期の子どもを「学校への準備」の段階にあるとみなし、グローバル経済の激しい競争社会の労働力を養うために、特定の技能や知識の訓練を始める必要があるとする。

それに対して第二つめの考え方は、この時期の固有性に重点を置こうとするもので、「[それ自体が重要な意味を持つ人生最初の段階]とする立場」である[ibid. 21]。それは、子どもが「自分なりの考えや関心にしたがって」「安心してありのままの子どもでいられる」生活を中心に保育を構想することにつながる。

大宮もまた「私たちの中には、二つの子ども観・保育観がいつも同居している」[ibid.]としながらも、しかしどちらか一方を否定し、他方だけを選択することは非現実的であり、この二項対立的な関係に解消されないための保育の理念が必要であることを提起している。

だからこそ「教育」と「福祉」、「生活」と「学習」、「今」と「未来」とを分けることはできないのであり、幼児教育と児童福祉という二つの言葉で別々に語られてきたことを一つの言葉、すなわち「保育 (earlychildhood education and care)」で語る必要がある…/このように国際的に幼保一元化は、子どもの生活と教育を切り離してはならないという統一的保育観を理念として発展してきたのである。[ibid. 23]

2-3. 子ども観と保育観

このように、わたしたちの社会が子ども期をどのような時期と見なすか、ということ、つまり子ども観と、この子どもに必要な環境や働きかけをどのように構想するかということ、つまり保育観とは、互いに緊密に結びついている。OECD報告が示しかつ大宮もまた認めているように、そこには二つの特徴的な子ども観が存在している。一方では子どもを啓蒙の対象として捉え、この時期に適切な働きかけは、知的肉体的精神的な促進にあるとする、積極的な教化訓練の立場である。他方ではこれと反対に、子どもを保護養育の対象であるという認識に立ち、いま・ここにいる子どもの有り様を尊重するため、大人からの働きかけは、受容的、追従的、消極的なものに留めようとする立場である。両者は日本のみならず各国にも共通して存在する、保育の普遍的な議論であるといえ、子どもが「自分なりの考えや関心にしたがって」「安心してありのままの子どもでいられる」[ibid. 21f.] 生活を保障され、そして「そのことがもっともよく「未来を準備する」ことにつながる」[ibid.]保育観を構想することが課題となってい

る。

この課題を保育の思想的観点から検討することは可能であろうか。思想概念的なアプローチは、いまを生きる子どもたちの問題を緊急に考える際、一見迂遠な手段のように思われる。しかし大宮もいうように、「たしかに政治状況をただちに变えることはできない。しかし保育観を変えることはできる」[ibid. 4]はずであり、保育とはどのようなものであるかという議論を丁寧に積み上げていくこと、そのための概念的な検討を行うことは、必要であると思われる。その端緒を提供するものとして、以下、古典的な「保育の思想」において、すなわち「幼稚園」(Kindergarten)を創設したフレーベルの「保護養育」(Pflege)の思想を検討の対象とする。

第三章 フレーベルの保護養育 (Pflege)

1840年、フレーベルは自身の幼児教育の思想、すなわち恩物 (Spielgabe) による乳幼児期の教育を具体化するための施設を開いた。この施設は「一般ドイツキンダーガルテン」(Der allgemeine deutsche Kindergarten)と名付けられた。シュプラングーによればフレーベルは生まれて間もない乳幼児期から始まり、「あらゆる年齢段階あらゆる教育領域」[Spranger, 1972 : 328=1983 : 6f.]で実行されるまじしく「人間の教育」の構想を持っていたが、結果的にフレーベルの生涯で為し得たのは就学前教育施設の具体化だけであり、他の年齢段階におけるそれは構想に留まったという [ibid.]。

この施設では就学年齢に達する以前の子どもの教育を特別な「保護養育」という観点から展開しようとしたおそらく世界で最初の試みであり、フレーベルがここでこの時期の子どもたちへの働きかけの根本に何を置いたか、保護養育に不可欠な要因を何に置いたかを分析したいと思う。

3-1. 「作業衝動」を内包している子ども

一般ドイツキンダーガルテンは「青少年および児童の自己活動と創造的な活動衝動を保護養育するため」の施設である⁷⁾。ここで保護養育の対象となっているのは、具体的なある年齢の子ども、あるいは貧困家庭の子どもや社会的にある階層に置かれた子どもたちではなく、あまねくドイツの子どもたちであり、彼らの「自己活動」(Selbsttun)、「作業衝動」

(Beschäftigungstrieb) ないし「活動衝動」(Tätigkeitstrieb) であると宣言されている。

このように「活動」や「衝動」に着目し、これを育もうとするのがフレーベル思想のコンセプトである。このことは、フレーベルが本質的に活動する存在として人間を捉えていることに由来している。こうしたフレーベルの人間観は初期から後期の著作まで一貫して随所に見られるが、例えば『人間の教育』(1826年)パラグラフ23では、次のように述べている。

神は、人間を、神自身の模造を、創造した。神は、人間を創造して、これに神の像を与えた。

それゆえ、人間は、神と同じように創造し、同じように活動しなければならない。[Fröbel, 1968 : 27=1997 : 49f.]

つまり神が創造するように、その似姿としての人間もまた、「作り出すこと」「生み出すこと」を本質的な性質として持っている、というのである。それは「創造主の本質、すなわち生き生きとした創造的な本質、生命にみち生命を生み出す本質」であり、「そのような本質が人間の内に生きている」[Fröbel, 1991 : 23]。

成人ではこのような衝動は「労働と勤労との、働くことと作り出すこととの、高い意味であり、深い意義」[Fröbel, 1968 : 30=1997 : 50]の高い意義として表れてくるのであるが、子どもや赤ん坊のうちは単に「感情や知覚とひとつになったもの」であり、「単にか弱い暗示であり、おぼろげな輪郭だけに過ぎない」[Fröbel, 1991 : 46]自己活動として表れている。

たとえ子どもが外見的には不活発であり受動的(受身的)であるように見える場合ですら、活動衝動と作業衝動とがすでに早くから子どもに存在しており内面的に作用している。[ibid. 51]

それゆえにフレーベルによれば、赤ん坊が自ずから動き出そうとしたり、あるいは幼い子どもが自ら何かを作ったり壊したりしようとするのは、まさに天与の賜物 (Gaben) である「衝動」の作用だったのである。

人間の本質は、人間の創造的な形成衝動のうちにあらわれている。そしてこの本源的・根本的な本質は、すでに子どもにおいて、すなわちものを観察し、ばらばらにし、再び一つにしたり、また構成したり創造したりする子どもの活動衝動のうちにあらわれている。[ibid. 23]

このように、「活動する衝動」(Tätigkeitstrieb)という本質を備えている存在として人間を捉えた場合、この本質は生まれたばかりの乳児にも備わっているものであり、この本質に関する認識、このような存在として子どもを捉えるべきだとする、独自の子ども観が形成される。

3-2. 「作業衝動」の保護養育

フレーベルは「子どもの真に人間的な発達のために、子どもの全面的に十分な教育のためになされるべきすべてのことは、作業衝動の保護養育ならびに子どもの最初の作業の保護と結びつけられなければならない」[ibid. 47]としている。このことが達成されるためには、活動させられる主体と、活動させようとする主体との間に、両者の行為を結びつけ、正しく方向付け、発展を促すための適切な媒介物が必要であった。それが「系統的関連的な…順序・段階において、また図解と説明文のついた恩物として公示」された一連の玩具体系である。

フレーベルによればこの玩具の体系は、子どもの「自己の力」と「自己活動」と「精神」の三者を、「単に偶然で恣意的な、ばらばらの訓練にゆだねないようにするため」に必要であり、そのほか、「力や活動の絶えざる発展を、基準になる対象物をもとにして観察すること」に役立つのである [ibid.]。

したがってこれらの玩具を使って遊ぶに際しては、次のことが強調される。

遊びが着想された精神、および玩具を使って遊びを演じる精神—その精神がまさに遊びにその意義と価値、その人間にふさわしい効果を与えるものであるということである。[ibid. 61]

これは恩物が制作者であるフレーベルの当初の意図に従って取り扱われねばならないことの宣言である。大人は気に入った恩物を気まぐれに提示してはならないのであり、個々の恩物が作られた目的を理解し、どのような手順でどのような「遊び」を展開し、発展させ、次の恩物へと導いていくかに熟達しなければならない。そのために個々の恩物には「指南書」が添付されているのであり、また、このための専門的な「遊戯指導員」の養成が必要でもあったのである。

実際、フレーベルが大人たちに要求する手続きは非常に煩雑である。第三恩物にいたっては、箱からの取り出し方、子どもへの提示の仕方、そしてしま

い方までが事細かに指定されている⁸⁾。またこのような知識のこと以外にも、非常に高度な観察や洞察を要求しているのである。例えば第一恩物のボール遊びを発展させるタイミングについて、働きかけを開始する好機を逸しないように次のように注意している。

すなわち幼児期の保育者たちにとって最も重要なことは、子ども自身における各々の部分の最初の、そして最もかすかな兆しさえ、直ちに身体的・心情的・精神的な本質として、そしてそれを現存在から感覚や思考にいたるまでの発展の過程において観察することである。[=1991: 71]

乳幼児期のあのくると目まぐるしく変わる気分や感情の波を観察し、束の間に訪れる集中の高まりを捉えなくてはならない。これは相当に熟練した保育の専門家にとっても高度な判断力を要求すると思われる。

3-2.1. ハイランド解釈 一教化として一

したがってハイランドがこのようなフレーベルの保育観を、「乳幼児の教化」(Kleinkindbelehrung)として捉えたのは適切であったかも知れない [Heiland, 2003: 299]。「乳幼児の遊びの保護養育という豊富な事例によってフレーベルが母親たちに呼びかけているのは、愛撫を断念し、子どもに、身体性と環境との関わりを意識させ注意を払うことである」[ibid.]。したがってハイランドはフレーベルの保護養育という概念は、大人からの意図的、意識的な働きかけによって「外界と自己との法則を認識する」ための教授プロセスとして解釈している [ibid.]。

3-2.2. ロマン主義的解釈

だがその一方で、フレーベルの子ども観をロマン主義的に理解する人々は、そこから導かれてくる保育観を教授・教化の過程としては捉えない。これらの人々は、フレーベルのキンダーガルテンのコンセプトに、ロマン主義的精神の根源を見出す。それは、「遊戯することないし遊戯は、この時期の人間の発達の最高段階である」[Fröbel, 1968: 36=1997: 71]とする、子どもの遊戯に対する高い評価や、「この時期の遊戯は、…たんなる遊び事ではない。それは、きわめて真剣なものであり、深い意味を持つ」[ibid.]という、ロマン派の文学者ジャン・パウルの遊戯観

との一致を、フレーベルの保護養育のコンセプトに見出していることからきている。このロマン主義的な解釈において遊戯の保護養育という概念は、神性のあらわれを知覚するものとして、子どもの自由な創造性を育むものとして解釈されている。特に、キンダーガルテンにおいて、大人が子どもと一緒に遊戯することについて示したフレーベルの次のような表明は、しばしばこの解釈が成立するための論拠とされてきた。

この学園の/計画/は次の通りである。/一、親と子、年長者と年少者、教師と生徒との両者の要求を満たす遊具・作業具、したがって陶冶手段を提供することである。つまりそれらを通じて子どもたちや年少者たちの生命が養われ、強化され、発展させられ、陶冶されると同時に、親たちやおとなたちの生命も鼓舞される。彼らが子どもたちや年少者たちと遊びに没頭している間に、少なくとも彼らに精神的・心情的栄養が与えられる。〔Fröbel, 1991: 36〕

ウルリヒはこのような大人と子どもとの遊戯において「大人たちは自ら「全面的な生の合一」へと立ち戻り、精神と事物に対する、精神的-神聖的な全結束性を体験する」〔Ullich, 1999: 354〕とし、バーダーはフレーベルの衝動の保護養育のコンセプトは、「子どもの神性を保護養育する」することであるとしている〔Baader, 1996: 234〕。

以上のようにフレーベル研究においても、フレーベルの保護養育概念を教化・教授的に捉えるか、ロマン主義的に捉えるかで解釈が分かれている〔青木, 2008〕。

3-3. 子どもの生命への細心の配慮としての保護養育

もしハイランドのいうように、保護養育概念が大人からの「外界と自己との法則を認識する」ための教授プロセスとして把握されるのだとしたら、この時、大人からの働きかけは意図的であり規定的な、積極的な教育に配列されるものとなるであろう。一方でロマン主義的な解釈に立てば、子どもの本質であるところの、活動や作業衝動の自由な表出を促すものとして、大人からの働きかけはごく消極的なものに留まるものとして捉えられることになるだろう。

ほぼ一世紀に渡って繰り広げられてきたこの議論

の結論を直ちに下すことはできないが、これら解釈上の相違は、子どもの活動や衝動への「保護養育」というフレーベルのコンセプトが、いかに両義的な性格を持つのかを表しているともいえる。しかしここで強調しなければならないのは、二つの解釈を支えている根幹には、乳幼児期の「わずかな兆し」も見逃すまいとする鋭い観察や深い洞察を、フレーベルが保護者や保育者を含む周囲の大人たちに要求したことである。

「願わくは人類にとってもわが子にとっても、この世への誕生と同時に、その本質が正しく理解され、その本質に即してはぐくまれ取り扱われ、彼の使命の全面的な達成に導くような真の教育があたえられんことを、まとめていえば、生命というものの正しい理解と取り扱いとがあたえられんことを」。〔Fröbel, 1991: 15〕

子どもの状態が現在どのようなものであるか、今子どもの意識がどこに向けられているか、つまり子どもの生命に対する細心最大の配慮を基礎に置かなければ、恩物による知覚や感覚、子どもの心情や精神に積極的に働きかけること自体が成り立たない。また、子どもの活力が発揮されるに委ね、極力働きかけを控えたものにする場合でも同じである。子どもの身体生命に危険はないか、子どもが今何をしていて、次にどのような行動を起こそうとしているのかに対する洞察が常に周囲の大人たちに要求されるのである。このことは、学齢期に達した子どもたちよりも、「自己理解や自己知覚」が「いまだまどろんでいる」状態にある乳幼児期の子どもたちに対して、より一層周囲の大人たちに求められることになる。

結びに代えて

以上本稿では、日本の保育制度における幼保一元化という大きな転換を、「保育」という語の指し示す範囲の変化でもあるとして捉え、この「保育」の成り立ちを支えている要因を検討するために、フレーベルの「保護養育」概念を問題にした。少子化や景気後退といった社会的な要因と強く結びついて引き起こされた幼保一元化によって、これまで二つの施設で重視されてきた〈養育〉と〈教育〉の区別そのものが、いまや保育における実質的な意味を持たなくなりつつある。そしてこのことが、保育内在的に概念の変更を求めた結果ではなく、区別そのものが

考慮に入れられないまま、いわば外在的に無効にされることになりはしないかと懸念され、保育概念の見直し、多様な観点から行われている。本稿はこの問題に古典的な概念研究の枠組みからアプローチすることを試みたものである。

保育は養護と教育が一体となったものであるというこれまでの定義は逆に、保育とはこの二要素によってこそ成り立つという意味でもある。したがって保育が就学前教育において他のものに代え難い重要な営みであるとするならば、われわれは、常に両者の緊張関係を念頭に置く必要があるのではないだろうか。それは、養護か教育かというあの議論に遡ることではなく、二つがいかに同時に可能となってきたのかを問題にする、ということである。それは、フレーベルの保護養育の思想の根幹としても確認された、子どもの作業衝動が芽生えてくる瞬間の、その微かな兆しも見逃すまいとする観察や配慮を基盤にしていなければならない。今後保育が子どもの知力や体力の育成、感性や創造力等の育成により積極的な働きかけをする方向へ進んでいくにしても、これらの働きかけが成立するには、必ずこの時期の固有性を尊重するという要素を持たなければならない。もしこの前提を維持できないのだとしたら、保育という営み自体が成り立ち得なくなるのであり、そうなってしまったとき、学校教育とは異なる就学前教育の固有性もまた、失われてしまうのではないだろうか。

参考文献

- 青木美智子：2008「20世紀ドイツにおけるフレーベル思想のロマン主義的解釈をめぐる」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第48巻。
- 大宮勇雄：2006『保育の質を高める』ひとなる書房。
- 近藤幹生：2007『保育園と幼稚園がいっしょになるとき』岩波ブックレットNo. 679
- 逆井直紀：2008「保育政策の動向」『保育白書』ひとなる書房。
- 汐見稔幸：2008「世界に学び日本の改革のゆくえを問う」『世界の幼児教育・保育改革と学力』明石書店。
- 実方伸子：2008「保育所の現状・制度の仕組みと課題」『保育白書』ひとなる書房。
- 森上史朗：2003「歴史をふまえて幼保問題を考える」『季刊保育問題研究』201号、4-11頁。
- 森上史朗：2005「わが国における保育制度の展望」—「幼稚園と保育所の関係」を中心に—『保育学研究』第43巻1号、92-103頁。
- 森上史朗：2008a.「教育要領・保育指針の制定の経緯とその変遷」『発達』No. 113, Vol.29.2-9頁。
- 森上史朗：2008b.「「保育」という用語を今後とも重視していく必要がある」『保育通信』No. 637。
- 垣内国光：2007『民営化で保育がよくなるの?』ひとなる書房。
- 鯨岡俊：2002『「育てられる者」から「育てる者」へ』NHKBooks.938.
- 鯨岡俊：2008「目に見える成果を出そうという「させる」保育の助長につながる危険性」『保育通信』No. 637。
- Baader, M.S.: 1996 *Die romantische Idee des Kindes und der Kindheit* Luchterhand
- Blochmann, E., Geißer, G., Nohl, H., Weniger, E. (Hg.) 1962/3 *Fröbels Theorie des Spiels. I-III*, Kleine pädagogische Texte 4, 16, 21. 3. Auflage. Verlag Julius Beltz. Weinheim.
- Heiland, H.: 2003 “Fröbel und Romantik” In: *Fröbelforschung heute*. Verlag Königshausen & Neumann. S. 297-309.
- Fröbel, F.: 1968 *Menschenziehung*. Hoffmann (Hg.). Pädagogische Texte. Verlag Helmut Köpper=荒井武訳：1997『人間の教育』上巻、岩波文庫。
- Fröbel, F.: 1991=小原國芳訳『フレーベル全集』第四巻、玉川大学出版部。
- Spranger, E. 1938 “Aus Friedrich Fröbels Gedankenwelt” In: *Gesammelte Schriften* XI. 1972. Quelle & Meyer. S. 328-375=『フレーベルの思想界より』小笠原道雄・鳥光美緒子訳、玉川大学出版部、1983年
- Ullrich, H. 1999 *Das Kind als schöpferlicher Ursprung* Julius Klinkhardt.

注

- 1) 大漢和辞典、第一巻、882頁。また日本で公的に「保育」という言葉が使われたのは明治12年(1879年)の文部省布達においてである〔保育用語辞典、4頁〕。
- 2) 括弧内引用文のママ、以下特別な指定のない限り同様
- 3) 日本では1990年に合計特出生率が1.57にまで落ち込んだいわゆる「1.57ショック」以降、社会政策上の課題となった。政府は「エンゼルプラン」にはじまる一連の少子化対策を打ち出し、育児休業制度や保育所の整備に

よる子育て支援を試みてきた。

- 4) 待機児童数は1990年代後半から高い水準で推移。2007年4月1日現在では17,926人である。
- 5) 今回の改定は教育基本法「改定」において新たに「家庭教育」「幼児教育」が位置づけられたこと、「改正」学校教育法でも幼児教育の重要性が謳われたことなど、「国家統制のもとでの幼児教育振興政策が幼稚園主導で展開されようとしている」こととの関係で新指針を位置

づけるべきだといわれている〔実方、2008：51〕。

- 6) 引用文中（ ）内引用者。
- 7) キンダーガルテンの「計画」の表題から引用。初出は *Sonntagsblatt* I, 1838. S. 9-14. In: Lange. (hg.) *Friedrich Fröbel's gesammelt pädagogische Schriften.*, abt. 2. 1966. S.
- 8) 詳細は『フレーベル全集』第四巻所収、第三恩物の章を参照のこと。